



Title	Synonymity考
Author(s)	西川, 盛雄
Citation	Osaka Literary Review. 1971, 10, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25742
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Synonymity 考

西川盛雄

I まことに、そこまで

本稿は *synonymity* に関する私なりの覚え書きである。

言語は三つ顔のもっている。例えていえば阿修羅像のようなもので、一つ一つの顔は切り離せないで、三つの顔が一体となってはじめて total なものとしての阿修羅像が成り立っているのである。この三つの顔とは言語の場合は音声と統語と意味である。そしてそれらはそれぞれの構造 (structure) を持っているのである。

さて本稿の目的は具体的に *synonymity* を考えていく中で意味の側面を少しでも垣間みていこうとすることなのである。

II

Synonymity はここでは *Synonymy* ともいわれ OED, WED においてそれぞれ次のように define されているところのものである。

OED (Synonym)

Strictly, a word having the same sense as another (in the same language); but more usually, either or any of two or more words (in the same language) having the same general sense, but possessing each of them meanings which are not shared by the other or others, or having different shades of meaning or implications appropriate to different contexts;

WED (Synonymous)

Capable of being substituted for another word or expression

in a statement without essentially changing the statement's meaning

それは又同時に英語学辞典（研究社）においては下記のようにまとめて説明されているところのものである。

「一言語において互いに同一又は近似の意義をもつ語をいう。類語にはいろいろの程度がある。」

さて synonymity を真摯に考察していく上でまずわれわれの興味ともなり、頭を悩ます問題は究極のところ、synonymity の有無についての問題である。果して synonymity はあるのかないのか、あるとすればどういうかたちであるのか。ないならばその根拠は何か？ いまこれを更に進めていけば synonymity の definition は何かという問題にぶつかるであろう。

この問題に悩んで論理実証主義、数理的形式論理学の助けの下にたどりついた一つの definition をここに一つ示しておこう。Benson Mates は古典的な論文 *Synonymity* の中で彼はこういっている。

Accordingly, I propose the following statement as a condition of adequacy for definitions of "synonymity" and as a guide for conducting research to determine which expressions are in fact synonymous for given persons : *Two expressions are synonymous in a language L if and only if they may be interchanged in each sentence in L without altering the truth value of that sentence.*

(イタリック体 原文)

しかし問題を *interpretation* による truth value の問題に帰してしまって問題は解決するというのだろうか。truth value は belief-context における propositional sentence の logical objectivity に関わる問題である。その時の propositional meaning は概して論理記号を用いて形式化す

ことか可能のものである。例えば次のようなものである。

1. $(x)(Px \supset Qx), \exists x(Px \supset Qx)$
2. Pa
3. Qa

P, Q は性質、様態などを示し、 a は x が specify された特定の対象である。

さてここにおける truth value は propositional meaning に関与するものである。ところか synonymity は又 lexical meaning の問題でもあるのである。むしろ lexical item 同志の synonymity か第一義的に問題になるものであるといえよう。更に Mates の “without altering the truth value of that sentence” というところも問題にしなければならないであろう。

いずれにしても synonymity の definition をめぐってその有無を言っていたのではへたをすれば不毛な循環論を繰り返すだけだろう。この迷路から脱するには言語の本質的側面を抑えながら、人間の認識構造のあり方にまで問題意識を広げ、そこを立脚点にしてことを論じなければならないであろう。

III

われわれの周囲の現実世界は豊富であり常に運動、変化している。更にそれは無限の多様性をもち、人間の五感 (the five senses) の能力、認識能力などではとうてい一度に捕えきれないものがある。しかし現実世界(物象、事象)は人間の認識において把握され、その時から現実世界との交渉が始まるのである。さて現実世界の物象、事象の豊富さは同時に人間の認識の豊富さ、従って人間の認識構造の複雑な多様性に連なる。厳密には、外界からの刺激を受容し、神経系の大脳皮質部の機能を基礎にして、概念形成過程、表象過程、更には情緒過程などにおいて、feed back を通して一つの mental development としての認識過程が豊かに形成されていく

のである。さてこの認識過程の豊富さはその理性的側面も、感性的側面も、何らかの具体的な表現行為によって外化、実現されてはじめて、人間関係の中で客觀性をもったものになるのである。その「具体的な表現行為」の一つに「言語表現」があるのである。

現実世界の物象、事象の豊富さ、従って認識過程の豊富さは更に言語表現を豊富なものにしないではおれない。實際、物象、事象の総体である現実世界 (the outer world) を厳密に捕えて表現していけば、その表現行為における言語形式の多様性はずい分複雑なものになってくるのである。

Synonymity もこの間の事情と無関係ではない。微妙にして繊細な差異を内包しながら、類似した意味内容をもつ語が多く産み出されてくること自体、言語表現の exactness や concreteness などの特長においてごく自然のことである。そこから諸々の synonymity 現象が出てくるのである。この問題は本稿の main point として次の chapter から詳述していくつもりである。

さて言語は人間の認識構造の反映であるか、それは相矛盾した二つの側面の同時的存在として常に統一されて、言語表現行為において実現されるという意味において弁証法的なものである。一方は他方の裏付けなしにはありえず、その密接な関係は相互補完的、相互媒介的なもので、両者は互に豊かに成長していくかんとするものである。その二つの側面とは、基本的に、大きく、F. de Saussure 流には、よく知られている。langue 的な側面と parole 的な側面である。又 de Saussure のように知識体系としての langue ではなく、chomskians によれば、faculté de langage という概念において competence にうらづけられた deep structure と morphophonemic features に支えられた performance としての surface structure ということになる。又 de Saussure の考え方を継承して Addresser と Addressee との間の表現行為そのものを communication 関係において切り取った形では、R. Jakobson 流の code と message ということ

になる。

先に述べた *synonymity* の有無についてはへたに論議することの不毛さがここから説明できるのである。

言語を *static*, 又は *statal* なものとして考えた *langue* 又は *code* の *level* ではたしかに *synonymity* はありうる。そしてそれは *dictionary* では一つ一つの *lexical item* をみていけばわかるのである。例えや *content word* であれば, *tell/utter*; *cry/yell*; *blast/gust*; *ship/vessel*; *silly/stupid*; *awful/horrible* などがある。*function word* であれば *a/an*, *about/around*, *some/any*, *if/whether* などか考えられる。

ところが *dynamic* な又は *changeable* な, あるとき, あるところである人がたゞ一回的な意味において行為として表現した *parole* (又は *message*) の *level* では, 厳密には同じ意味において別々の 2つ以上の語や成句 (*idioms*) が用いられるということはありえない。時間も場所も一定不变ではなく, 話者の心理状況も異なり, 一刻としてすべての *context* が同じであるということはありえないからである。この *level* では従って *synonymity* ということは厳密には成立しないのである。

問題は, ここでは, *synonymity* の有無そのものを観念的に, 不毛に論ずるよりも, 既述したように, 言語の本質的な矛盾の二側面を抑えながら, *langue* の探求の一環として *synonymity* をどう捕えていくかということにあるのである。

IV

synonymity には大きく二つに分けて考えることかである。下記の通りである。

- (1) 類似したものの相違
 - (2) 相違したものの類似
- (1) 類似したものの相違

これは元来類似した語であったものか多少の nuance の相違を含みつゝも synonymity を形成している場合である。つまり日本語に訳した場合には二つの語は第1義的には同じような意味になり、両者はしばしば混同して用いられるような場合がこれである。そしてわれわれが普通、synonymity という語を多く用いているところのものである。若干例示すれば次のようになるであろう。

① content word の場合

Noun : theory/hypothesis trap/snare/pitfall writer/novelist
fog/mist blast/gust

Verb : say/utter/state cry/yell eat/take fire/dismiss fix/settle
have/possess

Adjective : rapid/quick/swift clever/ingenious calm/tranquil/
quiet silly/stupid

Adverb : entirely/wholly awfully/horribly hard/earnestly
exceedingly/extremely

② function word の場合

Article : a/an

Preposition : about/around on/upon

Auxiliary : will/shall may/can

Pronoun : some/any one/you

Junction : if/whether but/however

その他例えば一つの語と idiom とのくみ合わせで postpone/put off, must/be compelled to などについてもいわゆる synonymity があるわであるけがここではおもに ① 又は ② を注視しておきたい。この種の synonymity では後に述べるような「類推」能力、もっといえば言語表現に

特有な as-if ability が働いていない場合である。

(2) 相違したものの類似

ここで一つの仮説をたてておかなければならない。それは人間は as-if ability をもっているということである。言語を考えていくとき、いやしくも表現の問題を深めていくとするならば imagination (構想力) の問題を抜きにして考えていくことはできない。インドのカント的観念論哲学者 N. V. Banerjee も言語を通して人間を考えていくとき、人間の imagination 形成の側面に重点をおいているし又そのことは正しい指適でもある。

この能力は又別に類推能力、又は観念能力といってもいいだろう。いずれにしてもわれわれの imagination (構想力) は一つの類推によって全く異質の別の種類の二つの（又はそれ以上）のものを一つに関係づけるものなのである。われわれはこれを一般に metaphor とか personification と呼んで rhetorical expression として考えるのであるが、synonymity の場合もこの as-if ability によって「相違したものの類似」として成立してくるのである。この種の synonymity では二つ（又はそれ以上）の語の第一義的な意味は何の関係も直接にはもってはいない。ところが as-if ability による imagination (構想力) によって一方が他方の synonymity として機能してくるのである。

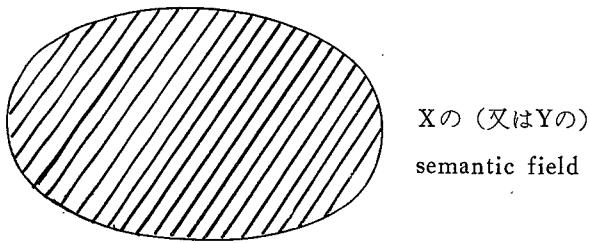
例えば元来 *sunshine* と *lover* は意味論的にも語源的にも何の特別な関係もないものである。前者は第一義的には “the shining of the sun” (ACD) であり、後者は “one who is in love with a person of the opposite sex” (ACD) である。ところが pop song などでもしばしば用いられるところであるが、*sunshine* は *lover* の metaphorical expression である。つまり両者はここでいう「相違したものの類似」における synonymity を形成しているのである。例には leader/head, king/crown, stony/

hard/unfeelingなどを今考えればよいであろう。

V

さて前章では大きく synonymity を2つに分けて考えてみた。これは lexical meaning の側面における分け方である。今一つ meaning においては propositional meaning の側面もある。意味のこの両側面は切り離して考えることはできない。ここでは今 lexical meaning の側面に spot をあてて考えていってみよう。

一つの lexical item はその内にいろいろの features を含んで、例えば polysemy といわれるような現象において意味が total なかたちで成立している。今この lexical item を Xとして考えてみるとその全体の意味領域 (semantic field) を下記のように記すことができる。

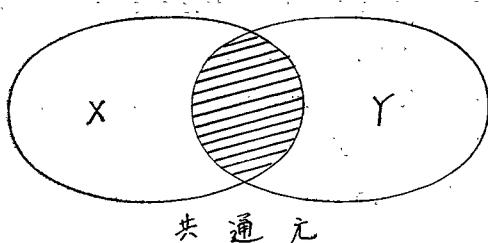


さて、この lexical item Xは具体的にはいろいろの元 (elements) から成立している。つまりXはいくつかの元 ($x_1x_2x_3\cdots x_n$) の総体として成立しているものなのである。

今別の lexical item Yを考えてみると、Yも本質的には上図と同じように描くことができ、それはいくつかの元 ($y_1y_2y_3\cdots y_n$) の総体として成立しているものである。

さてここで、lexical items X, Yの synonymity は両方の semantic field の重なった部分、つまり共通元として図示することができる。つまり下記の図における斜線部として共通元、従って synonymity の領域を

図示することができる。



さて lexical item X-Yの元 (elements) を数式化して整理してみると、次のようになる。

$$\begin{array}{l}
 X \left(\begin{array}{c} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \\ \vdots \\ x_n \end{array} \right) \sum_{n=1}^{\infty} (x_{i1}, x_{i2}, x_{i3}, \dots x_{in}) \\
 \quad \quad \quad i_1 = 1, 2, 3, \dots m, \\
 \quad \quad \quad i_2 = 1, 2, 3, \dots m,
 \end{array}$$

$$\begin{array}{l}
 Y \left(\begin{array}{c} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \\ \vdots \\ y_n \end{array} \right) \sum_{n=1}^{\infty} (y_{i1}, y_{i2}, y_{i3}, \dots y_{in}) \\
 \quad \quad \quad i_1 = 1, 2, 3, \dots m \\
 \quad \quad \quad i_2 = 1, 2, 3, \dots m
 \end{array}$$

そこでXとYの synonymity とはこの元 (elements) の内 $x_i \equiv y_j$ となるそういう元 x_i, y_j の有無を求めこれを具対的に説明するということになるのである。

Ⅷ

ここで一つの suggestion を与えてくれるのは Katz, Fodor の古典的論文 *The Structure of a Semantic Theory* (1963) である。彼らは semantic theory については 2 つの components があることを説明している。一つは dictionary 今一つは a set of projection rules である。そして特に synonymity について sense characterization of a lexical item の問題として次のようにいっていることは示唆に富む意見である。

Therefore, the information about synonyms which a dictionary must provide can be given solely in terms of sense-characterizations but not vice versa. In particular, two lexical items have n -synonymous senses if and only if they have n -paths in common, and two lexical items are fully synonymous if and only if they have identical entries, i.e., every path of one is a path of the other.

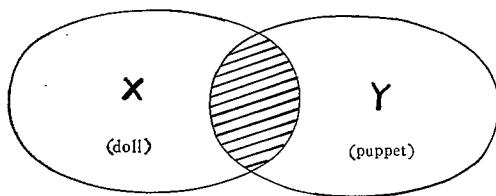
(イタリック体、原文)

ここでいう identical entries が本稿でいう共通元ということになるわけなのである。

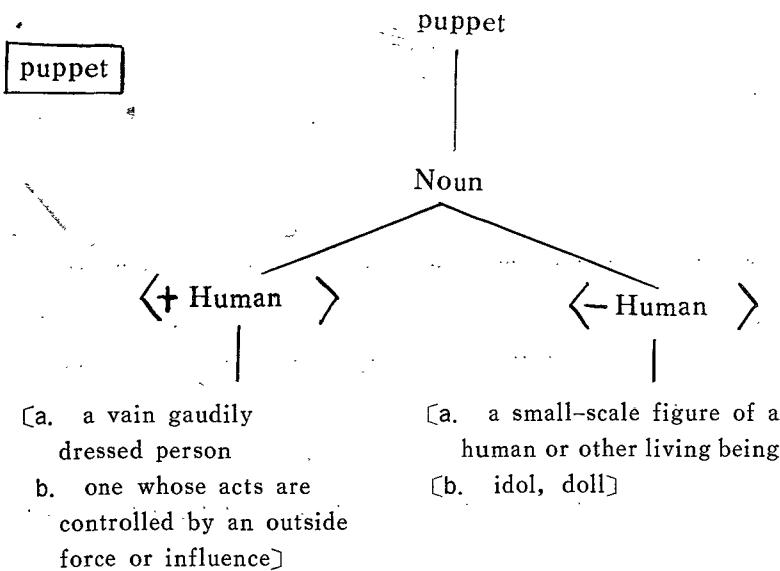
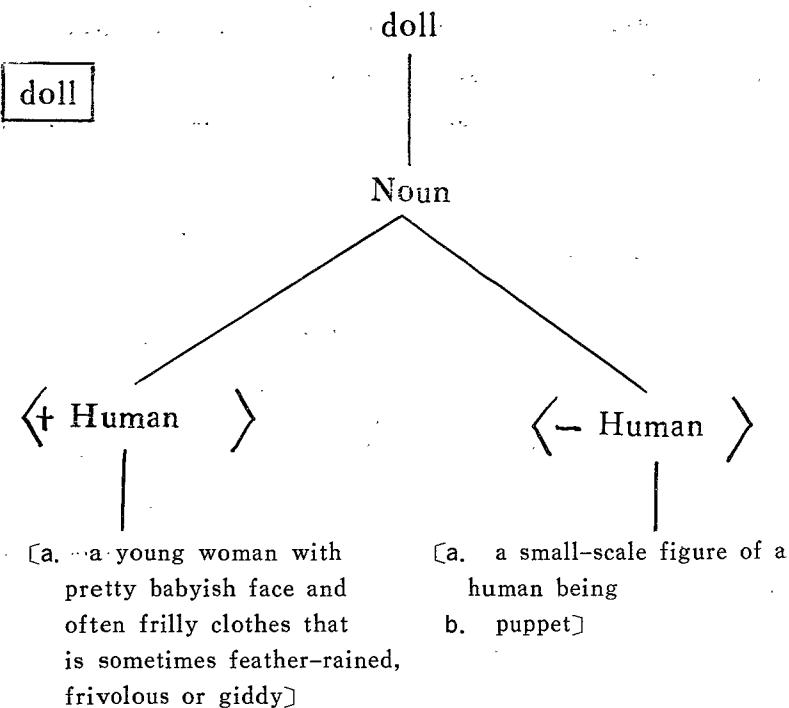
例えば lexical item が noun の場合と verb の場合に分けて考えていいってみたい。

(1) doll, puppet

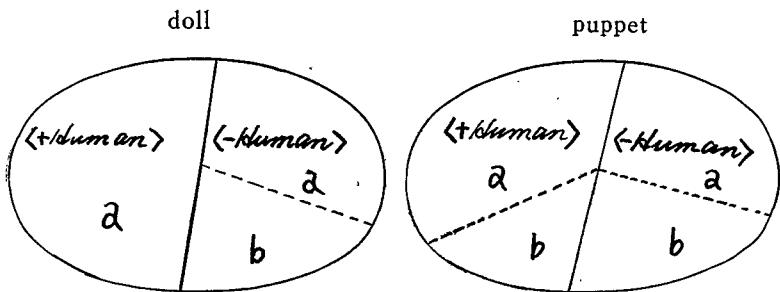
両者の semantic field を X , Y とするところの両者の共通元がわれわれの考える synonymity である。



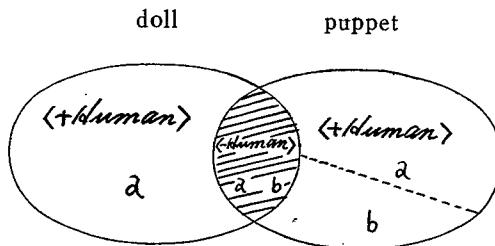
今 X (*doll*) の元は $(x_1 x_2 \cdots x_n)$, Y (*puppet*) の元は $(y_1 y_2 \cdots y_n)$ と考えると両者の共通元(synonymity)を探るにはそれぞれの semantic field を解体して具体的に両 items の semantic features を明示しなければならない。ここで dictionary entries を検討していくことになるのである。例えば *doll* と *puppet* の場合は次のようになる。



この2つの diagram によって少くとも langue のレベルにおいては <-human> の feature において *doll* と *puppet* は synonymity を形成しているのである。さて両者の semantic field を描いてみると次のようになる。



ここで両者の共通元として synonymity を形成している様子を描くと次のようになる。



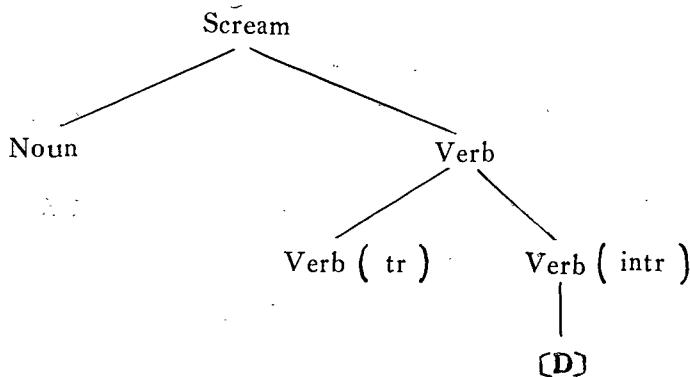
(2) scream, shout

考え方は(1)の場合と同様であるがここでは verb について若干述べてみたい。

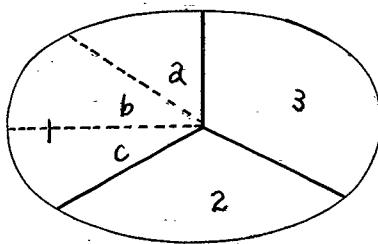
まず *scream* の verb 特に intransitive verb の distinguisher は WED によると次のごとくである。

- 1 a. to voice a sudden sharp loud cry
- b. to produce harsh and unpleasant high-pitched musical tones

- c. to make an outburst of noise resembling a scream ;
 to move with a screaming sound
- 2 to speak or write with expressions of intense hysterical emotion
 to make violent protestations or demands
- 3 to produce a vivid, blatant or startling effect like a scream.
- これは又同時に次の diagram の D なる個所の具体的な説明でもあるのである。



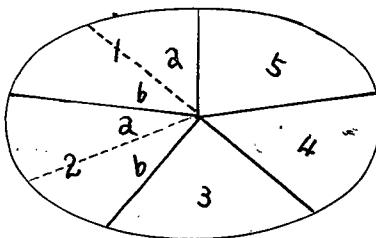
そしてこの lexical item の semantic field を示せば、 Vi に焦点を合わせば次のようになる。



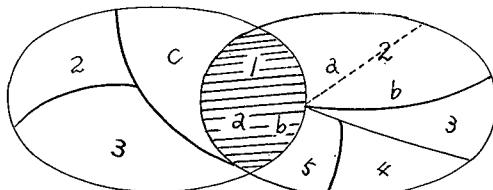
次に *shout* の場合 Vi に限ってその distinguishers を WED によって調べると次のようになる。

1. a. to utter a sudden loud cry
b. to speak in a loud voice
2. a. to command attention as if by shouting,
to be conspicuous
b. to issue publicity
to make a great to-do
3. to treat a person to a drink. (Australia)
4. to give expression to religious exstacy often in vigorous rhythmic movements
to take part in a ring shout
5. to render the words of a song in a rigorous rhythmic recitative manner

更にこの lexical item の semantic field を Vintr に限って示せば次のように考えることができる。



そこで 2 つの lexical items *scream* と *shout* の共通元として synonymity を図示して示せば概略次のようになるであろう。



VII

Synonymity をめぐる問題は意味の本質に入りこんでいかざるをえないであろう。本稿では synonymity の有無をめぐっての前半の考察を背景にして、①類似したものの相違による synonymity と②相違したものとの synonymity といふい方で人間の as-if ability への言及も加えて意味形成の一侧面について触れてみたつもりである。後半では具体的に調べたものの内、紙面の都合で、二つの例を出してそれぞれの distinguishers の共通なもの（共通元）の照合において static 又は statal な langue（又は code）の level における synonymity の説明を行なってみた。

紙面が限られており、調べて述べるべきことが多いが、基本的に私なりの synonymity の考え方だけ報告して筆をおきたいと思う。

(1971, 4, 25)